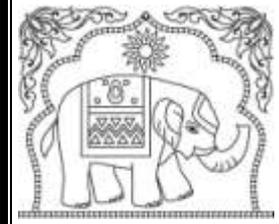




まいとりい मैत्री

No. 4 平成21年度 春号 - 2009. 4. 15 -
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイत्री) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

私たち東洋大学仏教青年会及び東洋大学仏教会は、お陰様で無事に1周年を迎えることができました。先日行われました総会において、青年会では新しい役員が決まり、仏教会では新たに監査として木村得玄様にご協力いただくことになりました。心機一転、今まで以上に活動の充実を図っていきたいと思っていますので今年もよろしく願いいたします。

編集長 藤浪崇裕

新会長挨拶

2009年4月15日 東洋大学仏教青年会 新会長
博士後期1年 板野義弘

このたび櫻井前会長の後を受け、東洋大学仏教青年会会長を務めさせていただくことになった板野義弘と申します。昨年度仏教青年会設立時、副会長に就任したときから、いずれ会長を務めることになるだろうという覚悟はしていたものの、予想よりもはるかに早い就任にと責務の重さに、まだ多少の戸惑を感じているところです。

東洋大学仏教青年会は、仏教徒に限らず仏教に興味のある人、語学の勉強のしたい人、みんなで遊びに行きたい人、飲みただけの人(!)など、広く門戸を開いており、勉強も遊びもしっかりできるところという自負がありますし、今後もますますその活動を充実させるべく努力したいと思います。

設立2年目ということで、まだまだ私個人としても会としても活動経験が不足している状態です。私の役目は仏教青年会の活動を軌道に乗せることであると感じていますが、これはもちろん私一人ではできません。会員の皆様には「自分の行動、意見が仏青を作るんだ」という意思をもって、積極的な活動参加、意見交換など、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

また、渡辺先生をはじめ東洋大学仏教会の皆様にも、よりいっそうのご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



【目次】

新会長挨拶	……1	コラム「日本文化と仏教」③	……6
活動報告	……3	書籍、イベント紹介	……9
コラム「仏教人物列伝」③	……4	今後の活動予定	……11

2008年度の回顧と展望 ＜一向上門・向下門の哲学と仏教＞

東洋大学仏教会会長

文学部教授 渡辺章悟

東洋大学仏教会は東洋大学の学生組織である仏教青年会とともに発足して、2009年4月で早くも一年が過ぎました。この一年で仏教会会員も70名を超え、活動もそれなりに機能し、先ずは順風満帆の船出だったように思います。

東洋大学は明治20年（1887）に井上円了が東京・本郷の禅寺、麟祥院にて哲学館を開設したことにはじまります。その際に開学の理念としたのは哲学です。ただし、円了の考えた哲学が、仏教思想を根源とすることは、その最後の著書である



『奮闘哲学』の中で、「哲学の具体的な姿は仏教である」と述べていることなどから知ることができます。さらに注目されるのは、哲学に＜向上門＞と＜向下門＞があり、哲学の本来の目的は、向下門の哲学であると唱えていることです。

向上門とは真理を目指す方向の学問であり、これに対して社会に向けた方向の学問を向下門といい、この向下門こそが真の哲学の目的になるべきであるとするのです。このような円了の思想は、通常は円了の出身宗派であった浄土真宗が重視しない『般若心経』を敢えて取り上げ、そこに見られる“有の否定である＜空の思想＞”を、もう一度＜有の思想＞に転換して、「大正般若心経」を改作したことによって、何うことができます（詳しくは拙著『般若心経』大法輪閣、2009年2月、329頁以下を参照）。

円了はこの向下門の立場から、哲学の実行化をはかり、わが国で初めての通信教育である館外員制度を実行し、日曜講義を始め、修身教会運動を推進したわけです。ただし、円了にとっては、哲学と宗教（仏教）は一つの体の両面なのであり、哲学の実効化とは、いわば哲学としての仏教の実践でした。このことは、円了の膨大な著書に見られる仏教の活性化（活仏教）、そして、すべてを活かすという＜活動主義＞の宣言でも明らかです。

現代において、円了の説いた思想は、そのままでは受け容れ難いところもありますが、社会や人間に対する基本的な態度は、決して色褪せることはありません。私たちはこの生き方を範として、仏教及び仏教会の活動を推進して行こうと決意を新たにしています。

2009年度に向け、共に生き、活動してゆきましょう。

～ 活動報告 ～

東洋大学仏教青年会・仏教会総会

東洋大学仏教青年会・仏教会では、平成21年3月28日(土)に白山キャンパス6310教室(6号館3階)において平成20年度総会を開催した。橋本泰元議長(仏教会副会長)のもと、以下の議題に基づいて評議した。

1. 平成20年度の活動報告
2. 平成20年度予算の収支報告
3. 平成20年度決算監査報告
4. 平成21年度仏教青年会・仏教会役員選出
5. 平成21年度の活動予定
6. 平成21年度の予算案
7. 講師紹介



平成21年度役員は次の通り。

<u>仏教青年会</u>		<u>仏教会</u>	
会長	板野義弘	会長	渡辺章悟
副会長	櫻井宣明	副会長	橋本泰元
	藤浪崇裕	事務局長	岩井昌悟
幹事	藤井明	幹事	山口しのぶ
	高木俊次		沼田一郎
	大川詩織		出野尚紀
		監査	木村得玄



総会の風景

大正大学仏青との交流会（兼忘年会）

東洋大学仏教青年会・仏教会では、平成20年12月25日（木）午後6時から、仏教伝道協会ビル（港区芝）内の中華レストラン「菩提樹」において、忘年会を兼ねた大正大学仏教青年会との交流会を行った。大正大学からは、仏青会員の他、小峰彌彦先生（大正大学学長）、一島正真先生（大正大学特任教授）、塩入法道先生（大正大学仏青顧問）などの諸先生方にもご参加頂き、総勢30名余りの賑やかな会となった。これまで本会の会員のみで活動してきたが、他団体との交流による新たな知見の獲得や視野の広がりなど、たいへん好評であった。今後も継続して交流活動を図りたい。

写真は最後まで残って歓談していた参加者。



～ コラム「仏教人物列伝」③ ～

ゴータマ・ブッダ その三

④出家（つづき）

このコラムは「仏教人物列伝」ですから、予定では2、3回で「ゴータマ・ブッダ」を終えるつもりでしたが、完全に「ゴータマ・ブッダ伝」の連載のようになってしまいました。とはいえ、あと数回で終えようとは思いますが、もう少しお付き合いのほどよろしく願いたします。今回は出家の様子と成道以前に習得した禅定について紹介させていただきます。

釈尊が出家した年齢については 29 歳説と 19 歳説が知られています。日本は古来、伝統的に 19 歳説を受け入れてきました。19 歳説は『太子瑞応本起経』『修行本起経』『過去現在因果経』といった代表的な漢訳仏伝経典に見られ、そのためか中国で撰述された文献が主に 19 歳説をとり、29 歳説は『大唐西域記』が「踰城出家時も亦不定なり。或は云く、菩薩は年十九なり。或は曰く二十九なり」というように、両説併記される時にのみ記されるだけですから、日本においても 19 歳説が支持されたのでしょう。しかしインドの原典が残っている文献には 19 歳説を記す文献はなく、29 歳説のみが確認できます。代表的なものとして、パーリの「涅槃経」に「私は 29 歳で、何かしら善を求めて出家した。スバツダよ、私は出家してから 50 余年となった。正理と法の領域のみを歩んできた。……」という入滅直前の釈尊の言葉が記録されています。またこの問題を考える上では数字の 29 と 19 の表示方法も考慮するべきかと思われまます。漢字文化圏では「二十九」と「十九」を見比べると「二」を一字書き損じただけで数が大きく変わることが分かりますが、インドでは 29 を「30 から 1 を引く」または「30 に 1 足りない」(ekūnatimṣa) といった仕方で示し、19 は「20 から 1 を引く」または「20 に 1 足りない」(ekūnavīsati) となり、ちょっとした書き損じで 29 が 19 になることは考えにくいという事情があります。現在は 29 歳説が一般的に支持されています。

では釈尊の出家はどのようなものだったのでしょうか。初期仏教聖典には釈尊が仏弟子らに語った回想の言葉として「比丘らよ、後に私は、まだ年若く、髪は漆黒で、幸先の良い若さを有しながら、人生の初期に、[私の出家を] 望まない母父が顔に涙を浮かべて泣いているにもかかわらず、髪と髭をおろして、袈裟衣をまとい、家を出て、出家した。このように出家した私は、何でも善なるものを追求し、最上の寂靜の境地（涅槃）を遍く求めてアーラーラ・カーラーマに近づいた……」と記録されています。

釈尊の出家は後世、より文学的に彩られ、感動的な場面を含む物語に発展しました。菩薩は父・継母（マハーパジャーパティ・ゴータミー）や妻が寝ている間に、チャンナという馭者をともなって愛馬カンタカに乗って城を出ようとし、しかしその前に生まれたばかりの息子ラーフラをひとめ見ようと妻ヤショーダラーの寝室に入りかけ、ラーフラを抱き上げたら妻が目覚めて出家を止められてしまうと考えて、「覚者となってから会いに帰ってこよう」と決意したとなどとされています。

いかがでしょうか。先の全く誇張なしに簡潔に釈尊の出家の様子を記す初期聖典の記述は、それゆえいつそう、出家の本質を私たちにまざまざと伝えてはいないのでしょうか。涅槃を求める出家は、つまるところ、家族の意向といった世俗的な事柄とはどうしても相容れないのです。

ところで、文学的に彩られた仏伝経典の記事の方も、もう少し補足しますと、浄飯王は菩薩の出家をすでに感知していたので、これをなんとか阻止しようとして、見張りを増やしたり、門を閉ざしたりしていました。しかしながら出家を促す神々の協力により、門がおのずと開いたとか、カンタカが空を飛んだとか、様々なヴァリエーションがありますが、とにかく菩薩は無事、出城に成功します。しばらく進み、マツラ国の「アヌピヤ」とか「アノーミヤ」などと呼ばれる地でチャンナ、カンタカと別れ、そこではじめて菩薩は自ら髪を切り、衣を獵師と交換したとされます。

菩薩は出家してのち王舎城に赴き、そこでビンビスラー王の目にとまり、王はパンダヴァ山に菩薩を訪れ、その会談において菩薩が、覚者になった暁に再び王のもとを訪れることを約したとする場面はよく知られています。

さて「無師独悟」ともいわれる釈尊ですが、釈尊に先生がひとりもいなかったという意味ではなく、幾人かの先生のもとで修行をされたようです。仏伝経典には「バツガヴァ」(パールガヴァ)、または「ヴァーセッタ」(ヴァシシュタ) という名の仙人も言及されますが、初期聖典から名前が見える重要な先生は「アーラ

ーラ・カーラーマ」(アーラーダ・カーラーマ)と「ウッダカ・ラーマプッタ」(ウドラカ・ラーマプトラ)という二人の仙人です。二仙人ともガンガーの南の王舎城にいたようにも思われますが、一説には菩薩がウッダカ仙に会ったのはガンガーの北のヴェーサーリー(ヴァイシャーリー)とされています。一般的には王舎城で修行した後にブッダガヤー近くのウルヴェーラーで苦行に入り、菩提樹の下で成道したという順序で語られますが、釈尊が修行時代を過ごされた地域は、ガンガーを挟み、マッラ国のアヌピヤー、ヴァッジ国のヴェーサーリー、マガダ国の王舎城と、もっと広範囲にわたっていたのかもしれませんが。

アーラーラ・カーラーマ仙からは無所有処、ウッダカ・ラーマプッタ仙からは非想非非想処という禅定を習得しました。この二つの禅定は欲界・色界・無色界の三界の中、無色界に属し、仏教に説かれる禅定の中で、「想受滅定」(または「滅想受定」、「滅尽定」とも)という特別な禅定を除けば、最高峰の二つです。仏教の禅定には簡単に記すと、初禅→第二禅→第三禅→第四禅(ここまで色界)→(ここから無色界)空無辺処→識無辺処→無所有処→非想非非想処という次第があります。ところが「これは覚りに導くものではない」ということで、菩薩はこの最高の二つの定を見限って、次回に述べる苦行の実践を開始することになるのですが、なぜ仏教で説かれている禅定が菩薩によって否定されるのでしょうか。これは、禅定だけでは覚りに至らないという、仏教にとって大変重要なことを強調するためと思われる。覚りに向かうには智慧の開発が絶対に必要であって、どんなに深いというか高度な禅定に入定することができても、それだけでは決して覚りに至れないということです。またこの文脈には、仏教が禅定を外道と共有していることが示されています(先に触れた「想受滅定」のみは仏教特有のようです)。

これ以上はない(これ以上厳しくしたら死んでしまうという)ギリギリの苦行を実践したからこそ、成道後の釈尊は「もう少し厳しい苦行を行えば、苦行によっても覚りに至ることができたのではないか」といった外道から寄せられそうな異説を退けて、自信をもって苦行の無益さを説くことができるのです。同様に、禅定に関しても、「もっと高い禅定があって、それに入定することができたら、禅定だけでも覚りに至るのではないか」といった禅定のみによる覚りの可能性を否定するためには、釈尊は成道以前にそれ以上はないという最高の禅定を経験していなければならない。このような思考が、釈尊の成道までの記述の背景にありそうです。

今回は苦行の様子と降魔・成道についてとなります。

(インド哲学科講師 岩井昌悟・仏教会事務局長)

～ コラム「日本文化と仏教」③ ～

西行があこがれた桜と満月と涅槃

「ねがはくば花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ」

西行法師(1118~1190)のこの名歌を知らない人はいないであろう。願わくば、皓々と輝く満月を見ながら満開の桜の下で死にたい。日本人にとって美しい死のイメージにいちばん近いのがこれかもしれない。

仏伝によれば、釈尊の入滅は2月の満月の日。むろん古代インドの暦だから太陰太陽暦の2月15日ではないのだが、昔の日本人はその日を釈尊の命日と信じていた。だから西行は一人の仏弟子として、釈尊に殉

じて同じ日に往生を遂げたいと望んだのである。

昨年は3月23日が旧暦2月16日にあたった。「きさらぎの望月の頃」である。東京ではその前日、桜の開花宣言が出され、駒込の六義園では枝垂桜が満開を迎えて多くの人で賑わっていた。この枝垂桜は例年、ソメイヨシノより一週間ほど早く咲く。

われわれが花見で愛でるソメイヨシノは、江戸時代になってから江戸駒込染井村の植木職人が改良してつくりあげた品種で、西行が愛した桜はそれとは別種の野生のヤマザクラである。桜の名所で名高い吉野や、大閭豊臣秀吉の醍醐の花見もこのヤマザクラなのだ。ソメイヨシノより清楚な風情があり、また、ソメイヨシノと違って同時に開花することはなく、早く咲くのもあれば遅いのもあるというふうにも木によって個体差があるため、比較的長く楽しめる。しかしそれでも、平地より寒い山中では関西地方でも温暖化の現代でさえ四月中ば過ぎだから、実は西行の時代だと旧暦2月15日頃にはまだ早すぎて、咲いていなかった可能性が高いのである。

ちなみに、インターネットで検索してみると、最近前後5年間の旧暦2月16日は、06年が3月15日、07年は4月3日、今年が3月12日、来年は3月31日、再来年は3月20日である。こうして見るとだいぶ開きがある。もちろん場所やその年の気候にもよるけれども、桜と満月はそうそうタイミングが合うものではなさそうである。

——歌人西行として憧れる幻想的な死の美学、真言念仏僧西行としての釈尊への追慕。

その二つのファクターが両立することは、現実には滅多にない。だがそれは承知の上で、だからこそ、「夢のように美しい情景」「理想の涅槃」「仏道修行の完遂」として、西行は「願わくば」と詠ったのである。

では、西行にとって「月」はいかなるものであったか。

自家集『山家集』にこんな歌がある。

「いかでわれ清くくもらぬ身になりて 心の月のかげを磨かむ」

この「心の月を磨く」という表現は、覚鑿かくぼんの『心月輪秘釈』をふまえているとされる。新義真言宗を興した覚鑿が高野山を追われて紀川の根来寺に下ったのは、奇しくも西行が出家隠遁した年だった。覚鑿と対立していた側は西行の同族だが、彼自身は内紛に巻き込まれるほど組織の中で教学を学んでいたわけではなく、広く浅くいろいろなものを取り入れ、覚鑿かくぼんの著作にも触れていたらしい。

だが、出家したとはいえまだ若い西行にとって、月は美しい女人の顔かんぼせを象徴するものだった。白く輝く月を見れば愛しい女を思う、恋しさに涙する。月の歌は恋の歌だった。

しかし、高野山中に住すること三十余年、月はやがて「真如」「悟り」の象徴となった。歌をつくることもまた、煩惱にまみれて愛欲や生死の苦にのたうちまわる苦しみや悲しみを吐き出すためのものであったのが、仏道修行の一環と信じるようになっていった。

文治5年(1189)、齢七十二を数えた西行は高尾の神護寺に文覚上人を訪ね、そこで出家したばかりの少年僧明恵高弁と出会い、こう語っている。

「歌は即ちこれ如来の真の形体なり。されば一首詠み出でては、一体の尊像を造る思ひをなす。一句思ひつづけては秘密の真言を唱ふるに同じ。」(『明恵上人伝記』)

それから間もなく、京を離れて葛城山系西麓の弘川寺の山中に最後の庵を結んだ。健康状態がはかばかしくなく、長年住みなれた高野山もいろいろわずらわしくなり、俗塵を離れたのであろう。葛城山は役の行者ゆかりの霊山で、高野山とも近いし、都へも出ていきやすいわりに山深く、幽玄の趣がある。

しかし、浄土往生を願う一方で、歌への情熱、執念はいまだ衰えていなかった。病み伏してなお焦憂するのは、自作撰『宮河歌合』の判詞を藤原定家に依頼してすでに2年も過ぎているのにまだ完成しないことだ

った。

病みついたことが伝わると定家は大慌てで送ってよこしたので、西行はたいそう喜んだ。定家の父親で西行の積年の友人でもある俊成はこう書き記している。（『長秋詠藻』）

わづらふ事ありと聞きて、急ぎつかわしたりければ、限りなく喜びつかわして後、すこしよろしくなりて年の果ての頃、京に上りたしと申せし程に、二月十六日に
なむかくれ侍りける。

かの上人、先年に桜の歌多く詠みけるなかに、

「ねがはくば花のもとにて春死なん そのきさらぎの望月の頃」

かく詠みたりしを、をかしく見たまへし程に、つゐにきさらぎ十六日望日終りとげける事、いとあはれにありがたくおぼえて、ものに書きつけ侍る。

「ねがひおきし花の下にて終りけり ^{はちす}蓮の上もたがはざるらん」

建久元年(1190) 2月16日、まさに「きさらぎの望月の頃」の臨終。積尊に一日遅れたのも追慕のあらわれか、理想をそっくり実現させた最期に、歌人らはじめ友人知人たちは大いに感動し、語り継いだ。往生の日を予告してそのとおりに死んだ例は往生伝などにときおり見うけられるが、これほど美しい予言は他に例をみない。

しかしながら、その日、実際に桜が咲いていたどうか、本当のところはわからないのである。俊成にしても、他にもその最期について書き記した者たちも、実際には誰もその場を見たわけではなく、歌から想像しているだけなのだ。無粋なことをあえて言えば、念願の満月も曇が覆っていて見えなかったかもしれないし、雨でダメだったかもしれない。

しかしそんなことはもはや問題ではないのである。清冽な夜気、^{こうこう}耿々とかがやく月の光、ぼうとあたりを明るませる白い花房、桜の根元に横たわるひとりの男、漂泊の天才歌人、その死顔にはらはらと降りかかる花びら、幻想的な情景が思い浮かべられ、静謐で荘厳な死のイメージを重ね合わせることができれば、それで十分なのだ。

歌人西行はこうして伝説化し、その歌は日本人の理想の死の情景にまでなった。だが後世になるにつれて、仏弟子西行法師のイメージは薄れ、歌の意味もただ美しい夜桜と満月だけになってしまったのは残念なことである。

昨年の「きさらぎの望月」の3月23日、ひとりの男が一年余の闘病の末、静かに74歳の生涯を閉じた。若い頃、文学を志したが、北陸の旧家の末弟に生まれた彼は親兄弟に逆らえず東京大学経済学部へ進み、実業の世界に入った。企業人としてはなばなしい成功をおさめ、多くの人材を育てて敬愛を集めたが、本人は歴史文学の夢を諦めきれなかった。リタイヤして研究と創作に専念したい。その強い思いから仕事のかたわら小説サークルに参加し、読書会を主宰したが、しかし最後まで世俗の重責から逃れることはできなかった。

大の酒豪で、面倒見のいい親分肌。老若男女に慕われ頼りにされた。地域の人たちとも親密につきあい、小学生たちに人気の爺ちゃんでもあった。50年間連れ添った奥さんをして「まるで良寛さんのような人だった」といわしめた。

「人間好きの人間嫌い」とでもいえばいいか、純粹さゆえに嘘偽りを許せず、激しくぶつかり、そのたびに

深く傷つく。あんなに繊細すぎては生きるのはつらからう、そう思わされることもしばしばだった。実業と文学、どちらの世界でもなりきれず、どちらの世界でも半端者だと寂しげにつぶやいたことがある。最後まで挫折感を抱えていたようだ。

浄土真宗の盛んな地方で生まれ育ったせいもあり、宗派を問わず仏教思想に造詣が深かった。中国や日本の歴史、文学、芸能、美術と仏教思想とのかかわりを熟知し、経典や論書を精読していた。そういう人だから、西行に傾倒しなかったはずはなく、その跡をたずねて吉野や高野山、陸奥まで毎年のように訪れていた。

また、ひといちばい桜を愛し、全国各地の古木を花の時期に訪ねるのを楽しみとした。その様子はまるで古い友人に会いに行くというふうだったが、あるいは神のように思っていたのかもしれない。

その彼が東京でいちばん愛したのが、六義園の枝垂桜だったのだ。ここ数年、マスコミで紹介されて有名になり、ライトアップされて長蛇の列で入場制限されるほどだが、彼は学生時代、近所に住んでいたこともあって、戦後間もなく、まだこの枝垂桜が幼木で移植された当時から見守ってきた。60年でいまのような巨木に育ったことを、この地に埋葬された戦没者たちの霊がそうさせた奇跡とも言っていた。

朝9時の開園直後、まだ人が少ない時間帯に、その枝垂桜の前でじっと立ちつくしている後姿を何度も見かけた。何を思っていたか、その後姿は怖いほど厳粛で、とても声をかけられる雰囲気ではなかった。

その夜は、風は冷たいがよく晴れ、満開の桜の上、藍色の夜空に満月が冴え冴えと美しかった。西行を愛した老文学青年は、ようやく死の床から解き放たれ、念願の光景を見にやってきたはずである。

(大学院仏教学専攻博士前期課程2年 永田道子)

～ 書籍・イベント紹介 ～

《書籍》

・『金剛般若経の研究』

渡辺章悟/著 (山喜房仏書林 13650円)

古来より広く読誦されてきた大般若経典のなかの代表的な教典、『金剛般若経』の研究。

・『般若心経 テキスト・思想・文化』

渡辺章悟/著 (大法輪閣 3150円)

日本でもっとも広く親しまれている経典を、その背後にある般若経を視野に入れつつ、原典から解明し、アジア各地における信仰のすがたを展望。巻末に、著者のサンスクリット校訂本と発音・和訳・解説等を付す。

・『実践『ヨーガ・スートラ』入門』

番場裕之/著 (春秋社 2415円)

根本聖典『ヨーガ・スートラ』をヨーガ指導者の著者が自らの実践体験をふまえながら懇切丁寧に解説した入門書。

・『仏典をよむ—死からはじまる仏教史—』

末木文美士/著 (新潮社 1890円)

すべては仏陀の死から始まった。『法華経』『般若心経』『正法眼蔵』などの仏典を、今に生きる思想書として読み解き、仏教の精神史をたどる力作。

・『ブッダの詩—知恵と慈悲のかたち—』

奈良康明/著 (NHK出版 735円)

思いやり、やさしさ、憎悪や妬み—現代の様々な出来事や日常性の中にひそむ「心」。ブッダの選りすぐりの言葉を現代の事象に引き寄せ、著者の体験・見聞をもとに、やさしい文章で綴る。私たちの失った「いちばん大切なもの」とは何かを問いかける1冊。

・『空海の行動と思想—上表文と願文の解説から—』

静 慈圓/著 (法蔵館 2940 円)

空海はいかにして嵯峨天皇に接近し、親交を作ったのか。上表文と願文の解説から、人間空海の行動を解明し、「横縦」「機根」「因果」をキーワードに、空海の覚った密教思想の核心に迫る。

・『戦国仏教—中世社会と日蓮宗—』

湯浅治久/著 (中央公論新社 819 円)

おびたしい奴隷、戦乱や災害、長い寒冷期と飢餓……。悲惨な現実覆われた社会で仏教が果たした役割とは。

・『空也 我が国の念仏の祖師と申すべし』

石井義長/著 (ミネルヴァ書房 3150 円)

空也、物の怪や怨霊のはびこった古代平安京で、民衆に「南無阿弥陀仏」の念仏を勧めた空也。その生涯と仏教思想を辿り、市井の聖として生きた人物像に迫る。

・『山をおりた親鸞 都をすてた道元 中世の都市と遁世』

松尾剛次/著 (法蔵館 2,310 円)

親鸞、法然、道元、叡尊といった鎌倉新仏教の宗祖たちはなぜ山をおり、都市をめざしたのか。遁世＝世間との関わりをさけるのではない、逆説的遁世観を軸に描き出す新しい中世史。

・『儒教・仏教・道教—東アジアの思想空間—』

菊地章太/著 (講談社 1575 円)

なぜ異なる三つの宗教がアジアでは共存できるのか。死生観、自然認識、民間信仰などを題材に、衝突・妥協・調和を繰り返しつつ共存するアジア的宗教のダイナミックな思想構造を分析する。

・『中世密教寺院と修法』

西弥生/著 (勉誠出版 10290 円)

寺院社会と世俗社会との紐帯となった修法の内実について、修法論・法流論・史料論という三つの観点から検討を試みる。そして両社会の信仰に基づく結びつきがいかなる社会的条件によって成り立っていたのかを解明する。

・『弁慶はなぜ勸進帳をよむのか—日本の精神文化と仏教—』

小峰彌彦/著 (NHK 出版 693 円)

山伏に扮する弁慶が勸進帳をよむのはなぜ？ 錫杖や念珠にはどんな意味が？ 安珍・清姫だけでなく「道成寺」って？ 庶民信仰と大衆芸能の深い結びつき、そして多様な仏教文化のかたち。現代につながる日本の精神文化の諸相を明快に説く。

《イベント》

～ 春から夏にかけて行われる仏教イベントです。～

● 国宝 阿修羅展

東京では会期中の3月31日から4月19日まで、阿修羅とともに一具像として造られた八部衆像と十大弟子像の興福寺に遺存する脱活乾漆像14体すべてが一堂にそろいます。

日時：3/31～6/7

*休館日は月曜。ただし5月4日(月・祝)は開館、5月7日(木)休館。

会場：東京国立博物館平成館 (上野公園)

拝観料：一般 1500 円、大学生 1200 円

● 青松寺 仏教文化講座『正法眼蔵』に学ぶ会

道元禅師の御著『正法眼蔵』を少しずつ拝読し、東洋大学教授である竹村牧男先生が分かりやすくお話してくださいませ。

日時：原則として毎月第4水曜日の19:00～20:30

会場：青松寺・玲瓏閣

会費：無料

テキスト：岩波文庫『正法眼蔵』をご用意ください。

お問い合わせ：03-3431-3514

● 比叡山春季特別講座

延暦寺長藤・大僧正の山田能裕師、昭和女子大学学長の坂東眞理子氏による講演。又、講師の一龍齋貞水師の講談が行われます。

主催：比叡山延暦寺

日時：5/16 10時～

会場：延暦寺会館（比叡山延暦寺内）

志納金：4000円（講座受講料、昼食代含む）

*申込み制。申込み締切 4/30 消印有効

お問い合わせ：077-578-0001

● 増上寺 薪能

重要文化財の三門と、グラント將軍お手植えの松を背景に、篝火の灯りで演じられる能は、皆様を幽玄の世界へと誘います。

日時：5/30

チケット販売：3月30日（月）正午より

増上寺大殿1階ロビーにて（完全指定席）

S席 7,000円、A席 5,000円、B席 4,000円、C席 3,000円

お問い合わせ：03-3432-1431

● 平間寺（川崎大師） 御本尊弘法大師降誕会

当日は、午前10時30分に大導師当山貫首を中心に檀信徒、日曜教苑苑児、幼稚園園児等約千人に

よって表参道仲見世の練行列がおこなわれます。

また、川崎市弓道連盟主催による奉祝弓道大会が、境内特設弓道場において開催されます。

日時：5/17 11:00～

会場：川崎大師

お問い合わせ：044-266-3420

● 一隅を照らす運動 東京大会

ひろさちや氏による講演。又、天台聲明音律研究会、天台雅楽会、天台宗東京区寺院、神田秀順大僧正による法要が行われます。

主催：天台宗 一隅を照らす運動 東京支部

日時：6/6 午後1時

会場：九段会館大ホール

参加費：2000円

お問い合わせ：03-5785-3481

他にも多数行事がございますが、掲載しきれませんでした。
 仏教情報誌「ムディター」や、サイト「仏報ウォッチリスト」
 を参考して下さい。 <http://d.hatena.ne.jp/buppo/>

東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。（会員は無料です。）

《定例全体研究会》

活動報告や渡辺先生の講義「大智度論を読む」などを行います。

第1回 4月22日（水）14:40～16:10、甬水会館202教室

第2回 5月27日（水）14:40～16:10、文学部会議室（白山校舎6号館4階）

第3回 6月24日（水）14:40～16:10、文学部会議室（白山校舎6号館4階）

第4回 7月22日（水）14:40～16:10、文学部会議室（白山校舎6号館4階）

《語学勉強会》

※日程・場所については要確認。いずれの講座も初級者の参加が可能です。

○サンスクリット語読書会

「初等文法を兼ねたインドの宗教文献の読書会」

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日 13:00～14:30

開始日：4月22日（水）

内容：サンスクリットの初級文法をかじった方から、一人で読みこなせる方まで大歓迎です（配布物を変えます）。プレーナ文献と通じてインド思想を覗いてみましょう。

○チベット語仏典読書会

「ツォンカパのラムリム・チェンモを読む」

講師：石川美恵

日時：隔週土曜日 14:30～16:00

開始日：4月11日（土）

内容：初等文法を兼ねたチベット語仏教文献の講読。初級者も参加可能

○漢文仏典講読会

「仏教漢文初歩—『観音経』を読む—」

講師：橘川智昭

日時：隔週木曜日

開始日：4月16日（木）

内容：特に仏教漢文の入門者を対象として、古来日本で親しまれてきた経典をとりあげます。また経文を通じて仏教思想の基礎を学びます。

※時間・場所については要確認。

《各種研修》

※参加希望の方は必ずご連絡下さい。

① 4月29日（水）第2回東洋大学の歴史を歩く：哲学堂公園と周囲の古蹟をめぐる

4月29日（水）13時集合（都営大江戸線落合南長崎駅—E33—改札前）

〔コース〕

＜落合南長崎駅（改札口前集合）— みずのとう公園（野方配水塔）— 蓮華寺（井上円了墓所）— 哲学堂公園— 江古田ケ原・沼袋古戦場碑— 梅照院（新井薬師）— 新井薬師前駅（解散）＞

※約4時間をかけて歩きます。昼食は済ませてきてください。終了後、高田馬場にて饗宴予定。なおご参加頂く方には、哲学堂公園のガイドマップを差し上げます。

② 5月30日（土）創立一周年記念講演会

平成21年度東洋大学文学部伝統文化講座 公開講演・聲明講演「語りの源流—涅槃会 釈尊への追慕」

5月30日（土）

白山キャンパス井上円了記念館ホール（5号館B2）

14時15分～：開場

14時45分～：第1部 講演「私と仏教」滝田栄（俳優）

16時～：第2部 演唱「涅槃会」真言宗豊山派 迦陵頻伽聲明研究会

③ 6月7日（日）宮本先生と歩く寺めぐり：柴又帝釈天、中山法華経寺

④ 6月下旬 沼田先生と登る高尾山薬王院

※紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、以下のアドレスまでご一報下さい。

※現在新入会員を募集しています。入会希望者は以下までご連絡下さい。

※会員規約や活動内容などの詳細はホームページ（<http://www.toyo-yimba.org>）をご覧ください。

編集責任者：文学部インド哲学科4年 藤浪崇裕（東洋大学仏教青年会広報）

編集協力：大学院仏教学専攻博士後期課程3年 櫻井宣明

文学部インド哲学科2年 高木俊次、藤井明

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com URL: <http://www.toyo-yimba.org>

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 板野義弘

nyorol@hotmail.com